大本山永平寺

御征忌

今月二十九日は道元禅師のご命日です。永平寺ではこのご命日を「御征忌」と申し、二十二日の午後から三十日の朝までさまざまな法要を勤め、慇懃にご供養します。外来から有縁のご寺院さまの加担を頂きながら、厳粛に法要は営まれます。

道元禅師は建長四年（一二五二年）の七月十四日に永平寺を懐奘禅師に委ね、八月五日に病気治療の為に京都へ出発されました。しかし、病状は重く京都のお弟子である覚念さまの邸で静かに入寂されました。五十四歳であられました。

五十四年のご生涯を曇りなき心で全く妥協無しの生活を一貫された道元禅師を想うと、永平寺に起居し修行させて頂く私どもにとっては「斯(か)くありたい」と感じます。歴代仏祖のお示しを道元禅師は余すことなく、欠くることなく受け継がれました。今度は現代の平成の今を生きる私どもが受け継ぐ番です。密かに想いを胸に秘めて年に一度の大法要に臨みます。

大本山總持寺

九月二十日から二十六日にわたって、秋季彼岸会施食会が行われます。毎日、午後二時からの厳修となり、中日は禅師さまが大導師をなされ、大施食会が行われます。この日は大勢の施主の方がたが訪れ、大祖堂いっぱいに焼香の列が並びます。また連日、施食会の前には、布教師による施食法話が行われます。

法要は、手鏧と太鼓と鈸の交打によって始められます。鼓鈸三通といわれ、道場に仏さま方をお招きするための儀式です。

本山では、太鼓と鈸はそれぞれ対で鳴らします。タイミングが少しでもずれてしまうと荘厳な響きにはなりません。ぴったり一致させることはとても難しい事です。これを侍真寮が担当します。侍真寮は大祖堂を護り、すべての法式の進行を支える重要な役割を担っています。一糸乱れぬ進退が求められる為、常に最高の技量が発揮できるよう、日頃の鍛錬を怠りません。

施食会とは、縁ある御霊のみならず万霊を供養する法会です。この秋の施食会では、この度の震災で犠牲になられた多くの御霊を、皆で一心にご供養申し上げたいと存じます。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

蛇もまたこの世に生きん衣を脱ぐ

東京都　伊奈　三郎

評　涅槃図にもお釈迦様の死を嘆く蛇が居る。蛇も又我等の如く仮の世に生きる佛弟子。草陰に脱ぎ捨てられた蛇の衣。それを見る慈しみの眼差しがある。

大西日ぐにゃりと歪むダリの時計

秋田県　松山　蕗州

評　真夏の太陽は西に傾いても厳しい。その耐え難い暑さに自分の存在するこの空間も溶けそう。ダリの絵「柔らかい時計」を連想してしまった。心象を巧みに句にした。

炎天へ火急の用の靴を履く　秋田県　小田嶌恭葉

水割や八十二才の夕涼　埼玉県　中島　新一

囀の宇宙の中の坐禅かな　和歌山県　田﨑よし子

新樹光卒寿の母のぬり絵かな　三重県　米野てるみ

仏壇がふさがるほどの濃紫陽花　神奈川県　柳原あきとし

鎮魂の鐘つきゐたり余花の寺　岩手県　鈴木　道昭

自転車の漕ぎ切れぬ坂夏めける　北海道　福島　眞也

万緑の山に棚田はもどりたる　福島県　西木　甚

溝浚(みぞさら)へ腰こそ曲がれかくしゃくと　岩手県　関合　新一

目秤の実梅畑で買ひにけり　静岡県　渥美ふき子

＊選者吟

草の花歩いて行ける城址なら

五灰子

＊作句小見

小田嶌氏「靴を履く」に決意。中島氏「水割」が良い。田崎氏囀浄土の中。米野氏、私の義母も塗ってました。柳原氏それは見事な。鈴木氏、鎮魂の山寺の鐘。等々十二名の皆様の句、壺処を良く押さえた印象深いものばかりでした。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

遠山に夕日は沈み夫もまた淋しきときか口笛のして

東京都　長谷川　瞳

評　夕暮れ時は一日の疲れも兆して少し感傷的な気持になるものだ。遠くの山に日が沈むのを眺めていると夫の吹く口笛が聞こえてくる。夫と感情を共有することで満たされている作者の穏やかな暮しがしなやかな措辞に伝わってくる。

いたづらをなしたる幼の様子して沢蟹葉つぱの陰ゆあらはる

福岡県　三吉　誠

評　小さな生き物へ向ける作者の視線が温かい。幼子に喩えるからには身近にそんな様子を目にする機会があればこそ。沢蟹を詠いつつ子供の表情が見えてくるような作品である。

芋植えて頼りは母の農日誌風樹の嘆き鍬持つ度に
新潟県　星野　三興

五月雨をたつぷりと吸ひ大楠の外宮参道水のやさしさ
岐阜県　後藤　進

亡き夫の知らざる齢をわが生きて曾孫乗せたる三輪車押す
愛知県　深谷ハネ子

嫁がせし娘六人それぞれの電話番号空で言う母
山口県　浜田　道子

川底にでんと居座る石ありてそこより流れゆるやかになる
静岡県　土屋　君江

花はいい何の花でも瓶にさし飾れば客の顔のほころぶ
福島県　西木　甚

名も知らぬ瀬戸の島々茜して伊予の遍路の宿は近づく
福岡県　小林　栄行

没つ陽の茜の色が渚辺を歩む人らの面輪に映ゆる
北海道　吉田　洋子

涙とは不思議なるもの憂き心洗い流して後を止めず
兵庫県　河本佐知代

ベトナムの微笑む山河人は野に牛は耕し日はまた昇る
福井県　清水　博行

＊選者詠

母と同じ齢（よわい）の人の訃報聞く音のしそうな夕映えのなか

ちづ

＊作歌小見

長谷川さんは日が沈んだ直後、直前の夕照を詠う小林さんと吉田さん、今月は夕景に秀歌が多いなか、拙歌も偶然「夕映え」の歌。母が衰えゆくのを見る日常は悲しいもの。そんな折の訃報、見事な夕焼けで生が締め括られたようでした。